

立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)
 大学院生研究
 2011年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 文学 研究科 英米文学 専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科 英米文学専攻 博士課程後期課程二年	小椋 道晃 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	舌津 智之 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題名	メルヴィルの文学作品と十九世紀アメリカ文化 —大衆誌における作家的想像力を中心に		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科 英米文学専攻 博士課程後期課程二年	小椋 道晃	
研究期間	2011 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、1850年代に執筆されたメルヴィルのテキストを、同時代の言説と関連させつつ読み解くものである。Sheila Post-Lauriaが詳述したように、特徴の異なる二つの雑誌(*Harper's Magazine*、*Putnam's Magazine*)に書き分けていたメルヴィルの作家的戦略と、19世紀前半から中葉における社会的要請との間で、いかに作家が社会に対して懐疑的な視点を提示していたのかを再検討する。具体的には、政治的色合いの強い*Putnam's*誌に掲載される予定であった短編小説“The Two Temples”に見られる「キューバ」への言及と、同誌創刊号における「キューバ特集」の言説との関連性を探る。キューバの独立と合衆国への併合という矛盾した大義を掲げるアメリカについて、小説を通して考究したメルヴィルの作品は、したがって、必然的に多義的かつ複層的なものになる。さらに、独立戦争時の英米を舞台とする長編*Israel Potter*において、イギリスとアメリカの争いのなかで翻弄される個人がどのように表象され、また、いかなる国家像が提示されているかを考察し、領土拡張政策や奴隷制にかかわる問題が明確に存在する南北戦争前期という時代に、このような作品を書いた作家的意図をあぶり出す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ハーマン・メルヴィル] [19世紀アメリカ文化] [大衆誌]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

昨年度に引き続き、ハーマン・メルヴィルの作品を19世紀アメリカの歴史的文脈のなかで考察した。メルヴィルは、*Pierre* (1852) を出版後、*Harper's New Monthly Magazine* と *Putnam's Monthly Magazine* という性格の異なる二つの雑誌に(短編)小説を発表していったが、1854年の7月号から1855年の3月号まで、*Putnam's*誌に連載された *Israel Potter* においては、アメリカ独立戦争時の一兵卒の伝記を通して、国家から疎外され続ける主人公を描いている。この小説は、出版当時の書評によると、とりわけ、その「男らしいスタイル」を高く評価されており、独立戦争の英雄を描く本作品に、自己信頼に基づく男性的身振りが刻印されていることは明らかである。また、先に挙げた二つの雑誌において、Benjamin FranklinやJohn Paul Jonesといった実在したアメリカ独立戦争時の英雄たちの伝記が掲載されていたことから、当時の読者の関心に、ある種の愛国的風潮があったことは間違いない。従来、この作品は、独立戦争を舞台とするため、アメリカの独立革命神話に対する作家の皮肉や批判の書とみなされることが多かったが、英雄的男性像と作品の「男らしいスタイル」の強調にもかかわらず、ジェンダーやセクシュアリティの観点から考察されることはあまりなかった。そこで、主人公イスラエル・ポッターが必ずしも一貫した「男らしい」自己を見出すことはないことに着目し、彼のアメリカに対する忠誠と一体感が、奇妙にも同時代の状況に対する距離感を、ひいては疎外感をも孕むものとなることを検証した。作中で、何度も偽装を繰り返すイスラエルはむしろ、規範的なアイデンティティに疑問を呈すという意味で、すぐれてクィアなキャラクターとして浮かび上がる。そこで、イスラエルのクィアなアイデンティティに焦点を当てることにより、メルヴィルの考える、アメリカ的性格とは、孤独のなかで異質な魂同士が結びつく密かな連帯によって構築されるものであることを提示した。その手順として、まずは主人公イスラエルのアメリカ的性格の曖昧さを検討したのち、アメリカ独立革命時の英雄像が、まなざしの力学によって、虚像へと反転することを確認し、作家が英雄的なアメリカ人男性像を切り崩しつつ、アメリカ神話を注意深く転覆させていることを示した。そして、英国人の兵士に偽装するイスラエルが、捕虜となっている祖国の兵士と出会う場面で、同性愛的なイメージを喚起しながら、アメリカへの想いを共有する瞬間が描かれていることを指摘した。この研究成果は9月に開催された、アメリカ文学会東京支部月例会において口頭にて発表した。

「アメリカ的性格」を、小説を通して考究したメルヴィルの作品は、したがって、必然的に多義的かつ複層的なものにならざるを得ない。その背景には様々な要因があるにせよ、ひとつには、台頭する市場経済の脅威や、あるいは、センチメンタリズムを特徴とする「アメリカ文化の女性化」とともなう作家の男性不安という問題がある。その意味で、メルヴィルが《家》や《家庭》を明確な主題として書いた「I and My Chimney」は考察に値する重要な作品として挙げられるだろう。1856年の3月に雑誌 *Putnam's* に掲載された、この短編において、メルヴィルは、田舎の屋敷に鎮座する、巨大な煙突をめぐる対立する夫と妻の物語を描いている。本作品については、これまで様々に解釈されてきた。たとえば、作家の伝記的事実から、当時のメルヴィル自身の狂気を読み込むものや、また彼の家庭内事情を反映していると考えられるもの、あるいは奴隷制廃止運動にまつわる政治的なアレゴリーや、または男性性の不安を論じるものなど、実に多様である。多くの解釈が生じる背景には、この作品が、煙突の謎だけではなく、テクストそのものの豊かな象徴性もあいまって、読者の読みを誘発してきたことが考えられる。このように、作品がきわめて寓意的なテクストであるため、そこにさらなる解釈を付与するのではなく、作品構造そのものを解明すべく、多層的な読みを可能にするテクストの謎をめぐる、作家がいかにも物語を構築しているか、という視点で考察する必要がある。このことは、大衆誌における作家の戦略を考える上で不可欠な作業である。テクストにおいて、語り手である夫は、煙突をめぐる謎について、「秘密の奥深い場所を暴きたてたばかりに、限りない悲惨な災いが起こったこともある」と述べ、秘密をそのままにしておくべきだと語るが、

研究成果の概要 つづき

そのような「煙突の謎」そのものと、小説の謎が重ねあわせられていることは明らかだろう。そこで、“I and My Chimney”における、語り手と煙突をめぐる謎について、その秘密を保持することの不安という点から考察した。この場合、秘密が実際に存在しているかどうかに関係なく、何か秘匿されているかもしれないという疑惑そのものが問題となる。そして、結果として家庭内に閉じこもることで、匿名の存在となっていく語り手が、迷宮的空間としての家を構築していることを浮かび上がらせた。この成果は、12月に開催された立教英米文学会において口頭にて発表した。

メルヴィルは、大衆誌における愛国的な傾向にもきわめて意識的であったと考えられる。その意味において、1853年の *Putnam's* 誌創刊号で巻頭を飾ったのが、“Cuba” (January 1853)と題されたエッセイであったことは、当時の合衆国の政治的、歴史的背景を考える上で注目し得る。雑誌創刊にあたって、*Harper's* 誌とは異なり、アメリカ人による作品のみを扱うことを打ち出した、愛国的な意識の強いこの雑誌が、まさにその冒頭において、「キューバ」を特集している。このなかで、論者は、スペインの植民地であるキューバを「抑圧された」状況とみなし、その自由と独立のために、合衆国に「併合」すべきだという、いわば矛盾した大義を掲げている。神の意志による「明白な運命」というスローガンを掲げ、文明化、民主化を押し広げるアメリカの領土拡張に対する欲望は、James Monroe 大統領が 1823 年にモンロー主義によって、西半球をアメリカの保護下、あるいは支配下におくことを宣言して以来、西部だけではなく、中南米に対しても向けられていった。そのような領土拡大の動きと連動するかのようになり、同時期の *Putnam's* 誌には、カリブ海の島々や、メキシコ、南米といった地域にまつわる旅行記やエッセイなどが数多く寄稿されている。メルヴィルは、1854年の5月に、“The Two Temples”の原稿を本誌に送付するものの、アメリカの教会に対する明確な風刺が原因で掲載を断られている。作家の生前には出版されることのなかったこの短編は、従来、アメリカの教会とイギリスの劇場という対立軸のもとで、その皮肉なコントラストに焦点を当てられてきた。たとえば、Marvin Fisher は、“The Two Temples”において、メルヴィルが「自称救世主国家としてのアメリカ」と「アメリカン・ドリームの実現にとって、不可欠な中心であるアメリカの理念」に対して異議を唱えるものであると結論づけている。しかしながら、作家のキリスト教批判やアメリカの理念に対する異議について、それがいかなる意図でなされているかに関して、具体的な議論は十分にされてはこなかった。そこで、“The Two Temples”における、ふたつのスケッチに連続性を見出し、作品を同時代の言説との関係性のなかに置くことによって、合衆国の領土拡張にとともなう矛盾に対する作家の懐疑的な眼差しを読み解いた。これは、10月に開催されたアメリカ文学会全国大会において口頭にて発表した。

また、昨年度に口頭発表したメルヴィルの短編“Cock-A-Doodle-Do!”についての原稿を大幅に修正したものが、*The Journal of the American Literature Society of Japan*に掲載された。この作品はメルヴィル作品のなかでもあまり扱われることのないマイナー作品ではあるが、一見ユーモラスな喜劇を装いながらも、奴隷制にまつわるメルヴィルの意識を暗示的に扱った作品であるとみなし、*Moby-Dick*から、その後にかかれる黒人奴隷の反乱を扱った中篇“Benito Cereno”へと通じる主題の連続性を見出すことができた。具体的には、テキスト細部における「カラス」や「沼地」といった語の象徴性を同時代の黒人や逃亡奴隷のイメージと結びつけることによって、1850年に新逃亡奴隷法が制定された結果、アメリカ北部と南部の分裂という危機的状況のなかで、テキスト内における南北の地政学的な線引きを曖昧にする力学を浮かび上がらせた。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所) 1
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

Michiaki Ogura. "Ambiguous Crows: Class Conflict, Slavery, and Disunion in Melville's 'Cock-A-Doodle-Do!'" *The Journal of the American Literature Society of Japan* 10 (2012): pp.41-58.

④

・学会発表

小椋道晃「家庭の不安—メルヴィルの“I and My Chimney”再考—」
立教英米文学会、2010年12月18日、於立教大学

小椋道晃「“The Two Temples”とキューバをめぐる想像力」日本アメリカ文学会、2011年10月8日、於関西大学

小椋道晃「アメリカン・キャラクター—*Israel Potter*におけるクィア・アイデンティティ」
日本アメリカ文学会東京支部例会、2011年9月24日、於慶応義塾大学

・ニューズレター

小椋道晃「磯江毅(Gustavo Isoe)と写実画」『ASLE-Japan Newsletter』31号(2011): p.13.